

## 聖講習会の追憶

### 開会

去年の八月、伯耆東郷湖畔の講習会がすんだ日から、一ヶ月待ちに待った我等の聖講習会は、美しい宮島で開かれた。そうして幾多の美しい記憶を残しつつ終つてしまった。出席しなかつた同胞たちに、その概要を報告するためにペンをとる。

七月三十一日、午後四時四十五分、宮島駅につくと、私は同じ汽車から降りている戸河内支部の実際寺梶原慶澤和尚を見出した。「おや！」思わず走りよつて先ず歡迎が私たちを包む。静かな海を渡つて厳島に渡り、旅館東屋に入れば、すでに、島根涙田支部長、幡谷先生、山口県の吉村先生、森脇先生等を初めとして数名の方々が先着である。それから一船ことに同胞の顔が増す。

七時になつた先着組二十名が、指定の上り下り両列車を待ち受けて渡つて来る汽船を出迎える。船の中からはすでにハンカチを振っているのが見える。皆上つて来た。駅頭、先ず、団歌を高唱して歡迎の辞が述べられる。列を作り団歌を唱いつつ宿舎に入る。

直ちに開会式が行われる。勤行、君が代、式辞、挨拶歡迎の辞、団歌、……式後、諸注意を与え役員任命、各班長紹介、部屋分けを終つて、ここに聖講習会の体系が出来た。その夜は皆湯に入つて旅のよこれを流す。寺院僧侶諸氏十名を左の通り班長となつてもらふ。

第一班 河野直臣氏

柳井覚善氏

第二班 柳田西信氏

村吉好勝氏

第三班 幡谷淳信氏

梶原慶澤氏

第四班 武井諦了氏

森脇星江氏

第五班 釜瀧春芳氏

竹林哲雄氏

歩々六十里

それは三十日の夕方本部全体が準備に忙殺されている時であつた。「やあ！ 西口さんが……」という声がする。出て見れば、玄関には、白のシャツにパンツ、草鞋をはいて、荷物を背に荷うた西口君が立っている。

岡山市から宮島まで六十里、無銭徒歩旅行を敢行した勇士、涙なくして迎えることは出来ない。風のたよりに、西口益雄氏、隠岐正雄氏の二人が、かかる壮拳をやるらしいとは聞いていたが、まさかと疑っていたのに、両氏は、二十七日、岡山を出発し、最初の日、岡山から福山まで十七里、更に、糸崎、西条等を経て、あの長い早天に焼

ける大地の上を、歩度計と詳細を描かれたる地図をもつて、一步一步、求道の歩をふみしめて、三十日鹿島に入ったのである。

金がない。だが講習会には出席したい。燃える求道心は、この壮拳を敢て断行せしめたのである。「思い立てば何でも出来る！」酷暑に燃える大地を数十万歩、痛めた足を引きずつて、希望の宮島に到着した両氏には、すでに何をもつても買えぬ尊い体験を与えられたはずである。何事でも願ひさえすれば出来上るとは言われないが出来ぬというに先立つて、願う心の薄いこと、出来ぬと定めてしまうことの多いことを思う。二人の壮拳は先ず我等の会をして感激深きものにした。

### 正信偈

八月一日午前八時、厳島小学校に於いて、慶澤和尚、導師となつて開講式を行い、講義に移る二日以後は開場は旅館の大広間に移された。講題「正信念仏偈」第一日序論に入つてから後、私は、初の三日間を殆んど、帰命無量寿如来、南無不可思議光の二句に使つてしまった。私のここ数ヶ月、わけて六七の二ヶ月間の殆んど全てがこの二句のために費されたと言つてもよかつた。他は全て二中核の説明であり、枝葉であるからである。あまりに難解しい講義であるという声がする。だが、

正しい概念のない直感と、全一なる直感のない概念とは、共に全き信ということが出来ない。我等は、如何に困難でも、如何に難解でも、真実の道を得るためには聖人の如く、謙虚に、そして緻密に、真理の殿堂の内奥に秘められたる如来の聖なるみ心を聞かねばならない。

教行信証は、如来と愚禿との交渉、宗教文化の最高峯である。血と涙をもつて綴られたる経験の記録であると共に、正しい概念の組織体系である。而して正信偈は、教行信証の縮図であると共に、蓮如上人以来、朝夕の勤行に念仏の里に聞えぬいて来た、なつかしい浄土真宗の象徴としての詩（偈頌）であると共に聖典である。帰命無量寿如来、南無不可思議光とは、仏名であると共に、聖人の大信の一切である。

一日たち二日たつうちに、会員たちの求道的態度は白熱して来た。全身これ耳、一語も聞きのがすまいとする真剣さ、ペンを持った皆の顔に、わからないと言つたものが見える。二度くり返し三度言い替える。真剣な求道の前にわからないことがあるものか。

### 身をもつて

十人の先生方は、熱心に各班の指導にあたつて下さる。色々な質問が出る。激論がおこる、時には夕食の鈴が鳴つてもやめない。

先生方に、お講義を頼んでも「私たちは語りに来たのではない。聞かしてもらいに来たのだ。」とて、私一人の講義にさせられる。御自身たちも、幾度か聞きもし、語りもし、学ばれもしたはずの正信偈の講義を、会員なみに聞いて行かれる。その謙虚な態度、三宝に対する帰依の相、恭敬の心、身をもつて範を示される。私たちの会に集まられる僧侶方に限つては金剛信に住しつつも、求道不退の方々である。

「偉大な未来を有する因位正定聚の人でなければならぬ。」

とは法蔵を語る頃私の講義の中にひらめいた言葉の一つであつた。愚かなものだけ、いい加減なところで知つた気になる。創造不退の動く相の中にだけ、生きたものを見る事が出来る。三宝に対する謙虚な合掌と、求道のなくなつた時、本能我のみが跳つて、信仰の火はすでに消えて、無残な骨格と灰燼のみが残される。そしてその灰燼の中からは再び久遠劫来の邪見と高慢とが頭をもたげる。

私は合掌して大法を聞こうとせられる先生方の態度に合掌しつつ、いよいよ大胆に細心に講義をつづける。この講義に限つて、あまりむずかしい言葉の解らない老女子たち二三人に関心を持ちながらも、決して遠慮しないで語つて行つた。

#### 勤学協会

のつびきならぬ事情のためにおくられて来る方がある。柳井先生は四日夕方来られた。止むを得ない事情のために早く帰つて行かれる方がある。こうして多少の移動をつづけつつ六十人程度の求道者を持つて会は午前五時半起床から夜十時（時には十一時十二時）までの行事をもつて運ばれてゆく。

二日の朝は未明から思い思いに隊をなして弥山登山を行つたが、私は体の調子と講義に対する使命を思つて不参加、その日午後の講義の中途、雨、記録係は「慈雨嵐と共に来る。晴れて後、涼味満喫し得て快哉」という。これから雨が度々あつて、急に涼しくなり、会全体が助かる。

五日我が光明団勤労学生協会員、佐々繁主事に引卒されて来る。午後佐々繁君は、協会の趣旨と信念とについて大獅子吼をする。協会は本団精神の実践化される重大な使命をもつた重要な機関である。主事の堅忍不拔の努力と全員の健闘によつて着々と成績をあげ、この不況時に仕事のみ多くて人の足らぬを歎く位である。会員の前に立つた生徒たちは嵐の如き拍手に迎えられる。

彼等は本団精神実践化のために立つ勇士である。中堅同胞と合したことを喜んだことと信ずる。

#### 幹部会議

その夜幹部会議は開かれる。

本部は左の四案を提出する。

- 一、本部建築案に関する件、
- 二、本団拡大強化に関する件、
- 三、各支部連絡提携の具体的方法に関する件、
- 四、本団精神の徹底的発揚のため各支部の活動及施設方法に関する件、

支部より提出せられたる案

- 一、昭和八年度聖講習会に関する件、

大体以上の五案について、意見、又、意見、甲論乙駁、夜十二時を過ぎるもつきず、遂に委員附托となる。

鳥取代表、西村美之氏の名議長振りあつぱれ感心。六日は午睡もせず各委員会は大精進を続けて下さる。成案は、六日夜発表可決する。いよいよ七日は最終日である。午前中を全部講義に費して、プリントの後半をこの日にすます。かくて零時より閉会式を行う。あらゆる行事が又しても会員全体を涙の人にする。

### 三人の女性

宮島の対岸大野村は、私がすでに九年間、講演に出かけた有縁の地である。大野支部と言つても未組織支部である。この大野村に三人の女性がある。其実践的な力強さに皆泣かされてしまった。

伊藤きくよ氏、児玉（元関本）まさの氏、中村（元大村）久子氏の三女性がそれぞれある。三十一日の朝早くから、最終の日の最後まで、色蒼めていつつも何ものにも屈せない意気に燃ゆる伊藤の奥さんの姿を見出さない人はなかつたであろう。私はこの春、まだ何れの地に於いて、聖講習会を開いていいかわからない時、この人と相談することによつて厳島と一決したのであつた。それから後この三人の同胞たちが、どれだけ待ちに待つたことであつたか。七日昼、時節柄質素なる宴会の時、お膳の向うにつけられたお土産の二個の籠は、皆この人たちの手によつて造られたものであつた。『この籠だけで結構だ！』と叫んだ僧侶の方もあつた。のみならず、この大野支部主催の慰労宴会費だつて誰の手によつて出されたのであつたか。

少しも表には立たないで、この会の裏にあつて、体と心を過労しつつも働きつづけられたこの人たちを思わないではいられない。児玉さんのもと大野村では関本まさのさんと言つた、処女会中の第一人者、団の中型、今は嫁して児玉となつたが、暇をとつて帰つて来た一週間は何のために費やされたか、大村（今は中村）さんは、発会間際になつても出席しない、聞けば、舅の急病である。伊藤さんの面は大村さん思つて又しても曇つたが、三日目頃許されて出席した。「実践は三女性の如くなるべし。」との声さえ聞かされる。

### この事実

私たちは多くの同胞諸兄弟姉に、深く感謝すべき次の如き事実を報告しなくてはならない。

私たちが今や訣別の涙の中に閉会式を了えた時だつた。この度の会場たる、旅館東屋の館主星出良吉氏は、特に金一封を本部建設費にと寄贈された。かつて宿泊客に対してかくの如き行為がなされたことがあるうか。更に又、私たちの最後の昼食が大野支部慰労会の名において行われる時であつた。この七日間を、私たちの為に働いて下さつた、お女中、福島やよの、谷口るい、溝田いさみの三女性は、午餐の初めから涙の人たちであつたが、特に会員のために酒若干を寄贈された。客からの志によつて生きるこの人たちが、涙の中からこの贈り物と御挨拶には、全員悉く感激の涙の人とならざるを得なかつた。系統だつたあの難解な仏教教学を聞いたのではない。そして

僅かづつ立ち聞きしたとて解るはずはない。而して三女性は涙と共にこの拳に出た。ああ、それは一体、何を物語るか。

かくて午後五時、旅館の人々の新なる涙に送られてこの宿所を出費した。

その夜本部に立寄って下さった方々二十幾名、幡谷先生、武井先生、河野先生、吉村先生、大阪脇本氏その他……

「私どもは、この一週間の聖講習会を了えて、再び解散する。だが、我等は帰って行くのではない、如来を中心とするこの聖会より聖戦の旅に出てゆくのだ！ 戦い続けるために出てゆくのだ！

涙の中に固く誓って勇士たちはそれぞれの持場へに帰ってゆく。奮闘せよ。精進せよ。来年再び帰って来る日まで。」

何が故に

我等の聖講習会は何が故にかくの如く成功するのか。答えは簡単である。

一、集まった者のはつきりとした同胞意識。

一、真剣なる求道的態度、

主なる原因はこの二つにつきる。普遍なる如来の大信海に融けあう、君と我なのだ。そこには、学者もおれば百姓もおる。老人もおれば若人もいる、だが化して一団である。絶対平等の同胞である。

はるばる九州から、一切をすてて、この暗い心が打開せられない以上再びかえらなことの決心で参加された人がある。煩悶のある人はもちろん、すでに如来の大海の中に誕生せる人は、いよく不退転に、無上正真の大道をきわめて歩もうとする。全身全霊を托して求道三昧をつづける、これ本団独特の空気である。

我等の世界では、実行しなかつた自己の不誠意を、言い訳することを断じて許されない。費用がありませんでした。時が許されませんでした。曰く何、曰く何、我等はそれに同情する。だが、ソロバンをすてて、唯無条件に実践する人々によつてのみ、何ものか、築かれる。我等は実行しなかつた部分に対しては唯沈黙すべきではないか。歴史を播け、そして知れ。あらゆる尊き人類文化の柱石となった人たちの生活が何であつたかを。

我等は悲痛な努力を通して、喜ばざるを得ざる一点に我を発見した時、初めて因縁を喜び得る。聖人は常に宿縁を喜び得た人である。

追想

私は聖講習会后、鳥取市の宗教教育講習会に出講して、ここにも西村美之法將軍の徹底的な大聖戦の相に合掌せしめられた。而して、大阪の一行と別れて、岡山支部の講習会に出席した。ここもまた、何かしら、鬱勃たる底力を見せて隆々と向上発展の勢が見える。至る所、よるとさわると話は、又しても畿島の一週間にとぶ。そのなつかしかつた追憶談、そして各地とも、必ずこれであることを察する。大阪脇本氏のがきをよむ。

「和田山で先生一人ぼっちにして、汽車は刻々に私達を大阪へ／＼とひきさいてしまいました。白いハンカチの見えなくなつた時、私に見えたのは、ただ熱い／＼涙だけでした。心は叫びかけます。その涙、その意志で戦えよと、声なき声が私を打ちます。他の人たちも唯無言で、目は血ばしついている。あの内奥に何が動いているのだらう。」

氏は今までの我を省みてグータラな存在だと言ひ、なさねばならぬ使命を叫び、念仏による感謝を語っている。

だがこれが唯、脇本氏一人の感慨であろうか。講習会に出席した同志から同志にとぶお便りを拝見する時、如何なる一片にも、力強い何ものかゝ燃え、激励が盛られ、感謝があふれ、使命に奮い立つた者の決意がほの見える。

ああ。又してもあの大広間を思い出す。あの力強い団結の中から何ものも生れないうでおさまるであろうか。私は昼となく、夜となく、奮闘精進を続けて下さつた同胞たちに感謝し、その赤誠がいよいよ私の一生涯を捧げしめる強縁であることを感銘し、全員が聖戦の陣頭に大活躍せられることを信じて忘れないであろう。

終に私は全団員が一生に一度は必ずこの聖講習会に御出席あらんことを切念してやまざるものである。